

見えないところにそれはある

茨城大学教育学部准教授 大 辻 永
(理科教育教室)

今回のテーマは、「真の学力向上を目指して」です。すると、「普通の学力」とは違う「真の学力」が他にあつて、「普通の学力」よりも「真の学力」こそ目指すべき、というメッセージが見えてきます。「真の学力」とはそれだけ見えにくいもの、測り得ないもののようなのです。

先生方の情熱^{ほつぱら}は実践レポートを拝見すると、平成二十一年に改訂された学習指導要領について最初に言及されるものを多く見受けられます。学習指導要領は法的拘束力がありますので、当然なのでしょう。しかしそれだったら、教年早く改訂された教育基本法に触れても良いのではないかと思うのです。昭和二十二年以来の改訂でも変わることがなかった第一条「教育の目的」の冒頭、教育は「人格の完成」を目指すと一節です。改訂時は一時的に異論が噴出した基本法改訂でしたが、第一条を批判したものは見あたりません。子ども達に寄り添い過ぎ去りゆく時間の一瞬一瞬が、この大きな目的と何らかの形で関わっている。それが暗黙の共通理解であり、先生方が実践研究を行う時でもはたらく行動原理なのでしよう(審り添うだけでなく、自分のことを後回しにして子ども達のことを優先したら、それはもう「菩薩」の境地です)。

いう子どもの一言に、その瞬間に立ち会えた喜びを教師は感じる。・・・(中略)・・・それが、その子どもだけの発見ではなく扱われる。「いま、○○さんの言った意味、分かる人。△△さん、もう一回言ってみて」。クラス「みんな」でつかみとった発見として扱われ、思いついた子ども、個人が賞賛されるだけでなく、「みんなの学び」に貢献する充実感を味わう。人は文脈の中で生きています。小さな「自己実現」と「社会貢献」を積み上げていく中で、付随的に知識・技能が身に付いてきたとも捉えられる。私たちは友達と共に育まれてきた。「みんなに育てられた」と言っても過言ではない。まさに「学友」である。個人が育まれると同時に、将来の社会が形成されている。

そういった子どもの成長を、それとなくお膳立てする脇役が教師である。教師の巧みは、すぐに答えを言わない。子どもに発見させる。子どもの着想を信じて「待つ」。極端には、「待つ」ことが仕事とも言える。最後は科学的に正しい言葉で閉め、概念や手順を定着させる。・・・

・・・教育的アプローチは職人芸である。逆に、ちよつとした自分の一言が子どもの一生を左右してしまう怖さもある。その責任と重大さを意識しながら、一瞬、一瞬、それまで身につけてきた全てを、全人格をかける。教育とは、全身全霊をかけて他者に臨む人間的な営為の一つで、専門性の非常に高い職業である。

注意したいのは、子どもをもって「完成された人格にする」ことが目的ではなく、「人格の完成を目指すこと」が目的だということ。すなわち、「完成した」と思ったら、別の仮題が発現してこのプロセスには終わりが無い。人生を「修行」のように見る見方があります。また、教師側の働きかけでは限界があつて、学習者自身に一生研鑽し続けることの価値をわかってもらいたい、そのように自ら振る舞うようになってもらわないと、この目的は成就したことになりません(まるで仏教で言う「発願」のようです)。極めて困難ですが、私たちはこういう高い理想を「教育の目的」として暗黙のうちに共有しています。捉えづら「真の学力」を探るヒントも、こういうところにありそうです。

「人格の完成」を目指す、子どもとの一瞬一瞬を、私たちはどのように過ごしているのでしょうか。以下、少々長くて恐縮ですが、理科教育に関係して最近書いたものの中から引用してみます。

・・・教師は、いつ言うか、言い方はどうするか。どうしてその子がそう考えたか。その子の置かれた状況はどうか。一瞬の間に多くの要因が頭をよぎり、一瞬の判断で最も適切な表現(指導)をする。「今日は、この子は調子悪いな」、「いつもと違って今日はこんないい点に気付いている。よし、みんなの前で発表させよう」などと判断する。仏教で言う「対機説法」を、教師は常に行っている。「あつ、そうか!」と

熟の教師は、子どもが問題を解けるようになること、「解法」を身につけること、自分に近づくことを喜びとするのであろう。学校の教師は、そうではない。身につけた能力をもって、その子が将来に出くわす諸問題に対決していく、そういう人間を育てる。自分を超えてもらわねばならない。教師とは、将来の教え子を通して間接的に世界に貢献できることを喜びとする。その日々は「行」であり「道」である。・・・(大辻永 2009 文化に根づいたサステイナビリティと教育、『サステナ』11, 32-37)

「真の学力」は将来どこかで、大きく成長した学習者の中ではたらくもの(理科では「問題解決能力」とも言われています)であり、簡単に即時的に測れるものではありません。しかし、子どもが子どもであるうちに着実に植え付けておかねばなりません。タネのようなものです。そして、それは学習者が教材と向かい合う中だけで形成されるのではなく、日々の学級の中で、先生や級友との関わりの中で根付いていくもののようなのです。

《著休め》

柔らかい頭 (1)「水が解けたら何になる」中学生(江O)になる小学生(水になる)幼稚園児(春になる) (2)だまされたい「ごままりの中に入っているのは」空気「じゃ浮き輪の中に入っているのは」やはり空気だろ「違う泳げない人だ」

ジカ照
ベアが
ホームページ
の「足あが
先生論」文
大辻永先生
otsujih.com
ら先先生き
で